# 『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』vol.15

Jun. 2023

―― Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

## 『妙法蓮華経 法師品第十』　（迹門・流通分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 （法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』（方便品　八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ「聞解・思惟・修習」

（『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』）（法師品　二〇九頁三行）

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 （法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』　（『新釈法華三部経　第一巻』　P8・8行／P5・1行）

※ 表記　例：(P353・1行／P259・7行)　⇨　（『新釈・文庫版』頁数／『新釈・単行本』頁数）

◇　◇　◇

### 《授学無学人記品の復習》

**・学・無学の声聞への授記**　(P149・終行／P115・終4行)

見習いの修行者までも授記されたということは、自覚さえすれば、だれでも等しく「仏に成れる」のです。

**・身近な人の教化**　(P152・5行／P117・6行)

我々が身近な者、すなわち妻とか夫とか、子とか親とかを教化することが、一番難しいのです。口先だけで導こうとしても、到底できるものではありません。日常生活の実際の行ないによって感化するよりほかはないのです。

**・常随の侍者阿難**　(P153・終4行／P118・4行)

阿難（アーナンダ）は、浄飯王（じょうぼんのう）の弟・甘露飯王（かんろぼんのう）の子で、つまりお釈迦さまの従弟（いとこ）にあたります。提婆達多の弟でもあります。

**・密行第一の羅睺羅**　(P166・1行／P126・終7行)

羅睺羅（ラーフラ）というのは、障（さわ）りという意味です。シッダールタ太子が正法を求めるために出家したいと、ひそかに思っていられたころ、王子誕生の報をきかれ、おもわず「ラーフラ（障り）が生じた」とつぶやかれたといいます。〜　自分の生まれや身分を鼻にかけることなく、常にコツコツと陰徳を積み、静かに坐禅することをつねとしましたので、ついに、**《密行（みつぎょう）第一》**として、教団内外の信望を集めるようになりました。

『世尊、我等此に於て亦分あるべし』　（一九五頁　三行）

『我が願既に満じて衆の望亦足りなん』　（一九五頁　六行）

『爾の時に世尊、諸の菩薩の心の所念を知しめして』　（一九七頁　七行）

『阿難は常に多聞を樂い、我は常に勤め精進す』　（一九七頁　終四行）

**・多聞と勤修・精進**　（P187・終2行／P144・9行）

**『実践の重要性』**ということです。〜　阿難の前身である菩薩は、仏さまの教えをできるだけたくさん聞きたい、教わりたいと願っていたのに対して、お釈迦さまの前身である菩薩は、教えを修行し、実践することに務められたわけです。その違いによって、お釈迦さまの方がずっと早く仏の悟りを得られたのであります。

仏道を励むのには次の三つの道を兼ね行なわなければならぬとされています。

⇒　**聞（聞解）**（学習）　**思（思惟）**（思索）　**修（修習）**（実践）。

修習には**『自利の実践』**と**『利他の実践』**があります。

**・慈悲を習慣とする**　（P191・終5行／P147・3行）

利他行は慈悲心を養うものです。絶えず善行（ぜんこう）を行っていると、だんだん情緒（じょうちょ）が美しくなっていき、ますます善行を行わずにはいられないようになるのです。

**・利他行は智慧も養う**　（P192・5行／P147・終5行）

利他行を行なえば行なうほど、仏さまの慈悲に近い「慈悲」、仏さまの智慧に近い「智慧」が、次第次第にできあがっていくわけであって、**《法の実践》**が仏の境地への一番の近道です。

『方便をもって侍者となって 諸佛の法を護持せん』　（一九八頁　五行）

**・教化とは仏性を引き出すこと**　（P193・4行／P148・5行）

『法を受けて法子と為れり』　（一九九頁　三行）

**・法の子をつくろう**　（P203・5行／P157・2行）

自ら立派な《法子（ほうし）》となると同時に、この世に《法子》を無限に増やしていかなければらないのです。

『羅睺羅の密行は唯我のみ能く之を知れり』　（一九九頁　五行）

**・密 行**　（P205・終行／P159・1行）

**第一**に、どんな小さな戒律でも、また人の見ていないところでも、それを固く守り行っていること。**第二**は、本来、菩薩の身でありながら、それをかくして声聞として活動することです。

『世尊は慧の燈明なり 我授記の音を聞きたてまつりて 心に歡喜充滿せること 甘露をもって灌がるるが如し』　（二〇一頁　一行）

◇　◇　◇

## ＜法師品のあらすじ＞

比丘たちへの授記がすべて終わり、比丘たちはみな、明るい表情になりました。

ここで釈尊は、居並ぶ菩薩方に向かってお言葉を発せられました。

**【法華経の一偈一句を受持する者への授記　―『素直な感動』の大切さ】――**

**【二〇二頁 一行】** そのとき**世尊**は、最前列にいる**薬王**(やくおう)**菩薩**に話しかける形で、**八万の菩薩**たちに説かれました。

「**薬王**よ。ここにいる者たちは、神々や陸・海・空の龍、鬼神、そして人間および人間以外のあらゆる生き物たちです。また男女の出家・在家の修行者や、声聞（しょうもん）、縁覚（えんがく）の境地を望む者、そして仏の智慧を願う者など、それぞれの望む境地には違いがあります。しかしこれらの者たちが／（『咸（ことごと）く佛前に於て妙法華經の一偈一句を聞いて、乃至（ないし）一念も隨喜（ずいき）せん者には我皆記（みな き）を與（あた）え授（さず）く。當（まさ）に阿耨多羅三藐三菩提を得（う）べし』）『**妙法蓮華経**』の一偈（げ）・一句を聞いて、一瞬でも『**ああ、有難い！**』と心から思うならば、私はその者に成仏の保証を授けましょう。その者は必ず仏の悟りを得ることができるのです」

**【二〇二頁 六行】** **世尊**はさらに**薬王菩薩**に仰せになりました。

「それは今だけのことを言うのではありません。／（『又如來の滅度（めつど）の後（のち）に、若し人あって妙法華經の乃至（ないし）一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦（われまた）阿耨多羅三藐三菩提の記（き）を與（あた）え授（さず）く』）私がこの世を去った後の将来の世に於いて、この『**妙法蓮華経**』の一偈・一句を聞いて、一瞬でも心から**有難いと思う者**にも、成仏の保証を授けます」

**【仏の滅後、法華経を信じ、仏を供養する人とは】――**

**【二〇二頁 終三行】**「また、『**妙法蓮華経**』の一偈でも信じ、それを受持（じゅじ）して『**五種法師**・**ごしゅほっし**』の行を実践し、経典を仏と同様に敬い大切に供養する者。すなわち仏に対して花や香を供え、宝物を供えるなど荘厳（しょうごん）を心がけ、香を我が身に塗り、幟旛（のぼりばた）を立て、音楽を奏で、合掌するなどの『**十種供養**・**じっしゅくよう**』を行う人（仏に『飯・水・茶』や花を供え、香を焚き、法華経を読誦し、教えを実践し、導き・手どりをする人）は、一体どのような人たちなのかと申しますと、その人々は、次のような人です」

**【今世、人として生まれることを願った人。『願生』の人】――**

**【二〇三頁 一行】**（『是（こ）の諸人等（しょにんら）は已（すで）に曾（かつ）て十萬億の佛を供養し、諸佛の所（みもと）に於（おい）て大願（だいがん）を成就して、衆生を愍（あわれ）むが故（ゆえ）に此の人間に生ずるなり』）「**薬王菩薩**よ。じつはこれらの人々は、**過去世に於いて無数**(**十万億**)**の仏を供養し、すでに救われた人であり、諸仏のみもとで多くの人々を救うという大願を成しとげた人々**であります。しかも自分が救われた状態に満足して安住せず、あろうことか現世で苦しむ**衆生を愍**(**あわれ**)**み、それらの人々を救おうと決意して、人間界に願って生まれてきた人**なのです」

**【『願生』の人の徳分】――**

**【二〇三頁 三行】**（『薬王、若（も）し人あって、何等（なんら）の衆生が未來世に於て當（まさ）に作佛（さぶつ）することを得（う）べきと問わば、示すべし、是（こ）の諸人等（しょにんら）は未來世に於て必ず作佛（さぶつ）することを得（え）ん』）「**薬王菩薩**よ。どのような人が未来世において

**『仏に成ることができるのか？』**と問われれば、今述べた人々こそ未来世において仏に成れるのです」

**【二〇三頁 五行】**「なぜかと言いますと、もし在家の男女（善男子・善女人）が**『法華経』**の一偈・一句を聞いて有り難いと思い、その教えを深く信じ、心に保ち、**『五種法師』**の実践行を行い、そして教えに対して帰依と感謝のまことを捧げ、先の**『十種供養』**を行うならば、／（『如來の供養を以て之（これ）を供養すべし』）その人は如来に対する供養と同等の供養を受けるべき尊き人であると言えます。／（『當（まさ）に知るべし。此の人は是（こ）れ大菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍（あいみん）し願って此の間に生（うま）れ、廣（ひろ）く妙法華經を演（の）べ分別（ふんべつ）するなり』）正にこのような人こそ、すでに大菩薩として仏の悟りを得ていながらも衆生を愍（あわれ）む心から、わざわざ自ら進んで苦労がある今世に生まれ、**広く法華経を説き広める人**なのです。それだけではありません。法華経を心の底から信じ、教えを受け止め、様々な供養を行う人なのですから、未来世において、仏となる人なのであります」

**【『如来の使い』としての因縁使命】――**

**【二〇三頁 終二行】**「**薬王**よ。よくよく心得るのです。／（『是の人は自（みずか）ら清淨（しょうじょう）の業報（ごうほう）を捨てて、我が滅度の後に於て、衆生を愍（あわれ）むが故に惡世に生（うま）れて廣く此の經を演（の）ぶるなり』）このような人は、清浄な行いを完成して、それによって得る功徳を打ち捨てて、ただ衆生を愍（あわれ）む心から、仏の滅後の悪世に生まれてきたのです。そして法華経を説き弘めるのであります。もし在家の信仰者が／（『我が滅度の後、能（よ）く竊（ひそ）かに一人（いちにん）の爲にも法華經の乃至（ないし）一句を説かん。當（まさ）に知るべし、是（こ）の人は則（すなわ）ち如來の使（つかい）なり』）たった一人のために法華経の一句だけでも説くならば、その人こそ**『如来の使い』**です。／（『如來の所遣（しょけん）として如來の事（じ）を行ずるなり』）そして、如来から**遣(つか)わされた者**として、**如来の聖行(せいぎょう)を行う尊い人**であります。ましてや大衆に向けて広く教えを説くならば、それはなおさらのことであります」

**【二〇四頁 四行】**（『若し惡人あって～ 現に佛前に於て常に佛を毀罵（きめ）せん～ 在家出家の法華經を讀誦する者を毀訾（きし）せん、其の罪（つみ）甚（はなは）だ重し』）「**薬王**よ。もし悪人が一劫という大変長い期間、直接、仏を罵（ののし）り続けたとしても、その罪はまだ軽い方です。それよりも法華経を説く在家・出家の信仰者に対してたった一口でも悪口を言い、悩ませ、罵倒（ばとう）するようなことがあれば、それは仏を誹謗（ひぼう）するよりも罪は重いのです」

**【『法師(法華経を説き、実践する者)』を、仏が守護する】――**

**【二〇四頁 七行】**「**薬王**よ。**法華経を心から読誦する人は、**／（『是（こ）の人は佛の莊嚴（しょうごん）を以て自ら莊嚴するなり。則（すなわ）ち如來の肩に荷担（かたん）せらるることを得ん』）**仏の輝きと同じ輝きを出している人**であります。そのような人は、**いつも如来が肩に担いでいる**人なのであります」

**【二〇四頁 終四行】**「ですからその人がどこかへ出向いたとすると、その方向に向かって礼拝すべきです。人々はその人に対して一心に合掌し、心から敬い、感謝のまことを捧げ、讃歎しなければなりません。花や香木を捧げ、天上界の宝石を散じ、宝石をうず高

く山積みするように供養しなければなりません。なぜかと言いますと、／（『是（こ）の人歓喜して法を説かんに、須臾（しゅゆ）も之（これ）を聞かば即（すなわ）ち阿耨多羅三藐三菩提を窮竟（くきょう）することを得ん』）その人が歓喜して法を説く時、それはそのまま、**『仏の悟り』**につながっているからなのであります」

**【『法師(法華経を説き、実践する者)』を、供養・讃歎しなければならない。また、その功徳】――**
**【二〇五頁 二行】** さらに**世尊**は偈を用いて説法を続けられます。
「もし、**『仏の悟り・智慧』**を得て自然と湧いてくる**『無上の智慧』**を成就したいと望むならば、法華経を受持する者を常に供養しなければなりません。つまり、この世の一切の物事を『**《智》**という**差別相**』と『**《慧》**という**平等相**』の両方を完全に見通す**《智慧》**を望むならば、この法華経を受持しなければならないのです。そしてこの教えを受持する者を供養しなければなりません。／（『若（も）し能（よ）く妙法華経を 受持することあらん者は 當（まさ）に知るべし佛の所使（しょし）として 諸（もろもろ）の衆生を愍念（みんねん）するなり』）法華経の教えをしっかり受持する人は、**『仏の使い』**であり、多くの人々を愍（あわれ）む尊い人であるからです」
**【(偈)二〇五頁 終五行】**（『清淨（しょうじょう）の土（ど）を捨てて 衆（しゅ）を愍（あわれ）むが故（ゆえ）に此（ここ）に生ずるなり』）「法華経を受持する人は、それまで自分が住んでいた安穏な浄土、清浄な境地を捨てて、衆生を愍（あわれ）んで、救うために娑婆（しゃば）世界に生まれたのです。そのような人は、何事にもとらわれのない自由自在の身の人であるため、自分が生まれようと思う所へ、思いのままに自由に生まれることができる人です。自分自身の幸せと安寧を求めず、わざわざこの汚濁（おじょく）に満ちた世界に生まれてきたその人こそが、／（『能（よ）く此の悪世に於て 廣く無上の法を説くなり』） この悪世の世界で、最高無上の教えを説き弘めることができる人であります」
**【(偈)二〇五頁 終二行】**「法華経を説く人には、天上界の花や香、衣服、宝を以って供養しなければなりません。そして私が入滅した後の世、すなわち恐れと不安、迷いに満ちた悪世で法華経を受持する人に対しては、／（『世尊に供養するが如（ごと）くすべし』）如来に対するのと同じように合掌・礼拝・恭敬（くぎょう）・讃歎しなければなりません」
**【(偈)二〇六頁 二行】**「もし、のちの世において、法華経を受持する者があったならば、／（『我遣（つか）わして人中（にんちゅう）にあらしめて 如來の事（じ）を行ぜしむるなり』） その人は仏が**『如来の使い』**として人間界に生まれさせ、**『如来の聖行(せいぎょう)』**を、如来に成り代わって行う人であります」

**【(偈)二〇六頁 七行】**（『人あって佛道を求めて～ 是（こ）の讃佛（さんぶつ）に由（よ）るが故に 無量の功徳を得ん』）「ある人が法を求めて、一劫という長い間、無数の偈をもって仏を讃歎したとしましょう。するとその人はその行為によって計り知れない功徳を得ることになります。**【(偈)二〇六頁 八行】**（『持經者（じきょうしゃ）を歎美（たんみ）せんは 其（そ）の福（ふく）復彼（また か）れに過ぎん』） 法華経を受持する人を少しでも讃歎するならば、それによって得る功徳は果てしなく、尽きることがありません。法華経を受持する人に対しては、八十億劫という数えきれない長い時間をかけて、最上の供養をしなければならないのです。それほどの意義と価値があるのです。このことから／（『若し須臾（しゅゆ）も聞くことを得ば 即（すなわ）ち自（みずか）ら欣慶（ごんきょう）すべし 我今（われいま）大利（だいり）

を獲（え）つと』）たとえほんの短い時間であっても法華経の**教えを聞くことができたならば、**それは**『大きな功徳を得ることができた』**と喜び、祝福すべきことであります」

**【『法師**(法華経を説き、実践する者)**』を罵倒する罪】――**

【(偈)二〇六頁 四行】「もし一劫という長い期間、邪悪な心を抱き、怒りに満ちた形相で仏を罵（ののし）り続ける人は、計り知れない大罪を犯すことになります。しかし、法華経を読誦する人に一瞬でも罵倒（ばとう）するならば、その罪の方は、仏に対する罵倒よりも、もっと大きく深いのです」

**【法華経こそすべての経の要であり、『諸経の王』】――**

【(偈)二〇六頁 終二行】「**薬王**よ。今こそはっきり言います。／（『我が所説（しょせつ）の諸經（しょきょう）　而（しか）も此の經の中に於て　法華最も第一なり』）私はこれまでに数多くの教えを説いてきましたが、しかしその中で**この法華経こそが『最高の教え』であります**」

**【法華経を説く者が心がけること】――**

【二〇七頁 一行】**仏さま**はさらに**薬王菩薩**に告げられました。

「私はこれまで数多くの教えを説いてきました。そしてこれからも多くの教えを説いて行きますが、／（『而（しか）も其の中に於て此の法華經最も爲（こ）れ難信難解（なんしんなんげ）なり』）この**法華経は、じつに難信難解の教えです**」

【二〇七頁 三行】「**薬王**よ。／（『此の經は是（こ）れ諸佛の秘要（ひよう）の蔵（ぞう）なり』）　この法華経は、諸仏が説く**すべての教えの『要となる奥義**･おくぎ　おうぎ**』の教え**です。そのために中身をすっかりと打ち明けて説かれたものではありません。ですから、むやみやたらと簡単に説けるものではありません。／（『分布（ふんぷ）して妄（みだ）りに人に授与すべからず』）　ましてや各論を分断して、一部分だけを切り取って説くものでもありません。部分的に説いてしまうと、法華経全体に流れる真意を理解できないためです。たとえば劇の一幕だけを観て、すべての劇を知ろうとするようなもので、一部分を取り上げて説くことはできいません。／（『諸佛世尊の守護したもう所なり』）　この法華経は、**諸仏が最も大切にし、守護していた大事な教え**です。／（『昔より已來（このかた）未（いま）だ曾（かつ）て顕説（けんぜつ）せず』）　これまで一度も**この教えのすべてを説き示したことはありません**でした。しかもこの教えを説くことになれば、／（『而（しか）も此の經は如來の現在すら猶（な）お怨嫉（おんしつ）多し、況（いわ）んや滅度の後（のち）をや』）　無知の人々から誤解を受け、怨（うら）みや嫉（ねた）みを招くおそれがあります。私が生きている現在でもそうですから、まして言わんや私が入滅した後の**未来世において、そうした誤解や怨**(うら)**み嫉**(ねた)**みを買うことは、なおさらのこと**であります」

【(偈)二一一頁 五行】（『是（こ）れ諸經の王なるを聞き　聞き已（おわ）つて諦（あきら）かに思惟（しゅい）せん　～　此（こ）の人等（ひとら）は　佛の智慧に近づきぬ』）　「法華経は、すべての教えの“総締めくくり”。**『諸経の王』**とでも言ってもよい教えです。この法華経を聞いて、深く思索をめぐらせるならば、その人は、すでに**『仏の悟り・智慧』**に近づいているのです」

**【『法師**(法華経を説き、実践する者)**』は仏から守護され、最も仏から信頼される人】――**

【二〇七頁 五行】「**薬王**よ。よくよく心得なさい。私の滅度の後に、この教えをしっかりと

護持し、学び、そして人のために説く者は、／（『如來則（すなわ）ち衣（ころも）を以て之（これ）を覆（おお）いたもうべし』）**常に『如来の衣』に包まれて仏から守護されている人**です。／（『又他方の現在の諸佛に護念（ごねん）せらるることを爲（え）ん』）しかも、他の世界にいる諸仏からも守護される人です。／（『是の人は大信力(だいしんりき)及び志願力・諸善根力（しょぜんごんりき）あらん』）法華経を説く人は、偉大な信仰の力と必ず仏の境地に達するという強い意志を持ち、あらゆる善行を実践する強い心を持っている人です」

**【二〇七頁 八行】**「まさに知らなければなりません。この人は如来と共にいる／（『如來と共に宿（しゅく）するなり』）**『如来の家に住む』**人であり、**如来と一体となった人**です。／（『卽（すなわ）ち如來の手（みて）をもって其（そ）の頭（こうべ）を摩（な）でたもうを爲（え）ん』）そして如来の手によって**『如来から頭をなでられ』、如来から最も信頼される人**です」

**【二〇七頁 終三行】**「**薬王**よ。場所を問わず法華経が説かれ、読誦され、書写され、あるいは書物によって法華経が説かれる所には、必ず七宝の宝の塔が、美しく、高くそびえ立ちます。しかし、その塔の中には『仏舎利』が祀られなくても構いません。なぜならばその塔の中には法華経があるため、／（『此の中には已（すで）に如來の全身います』）すでに**『如来の全身』が厳然(げんぜん)としてある**からであります」

**【二〇八頁 一行】**「この塔に対して、花や香、さまざまな装飾品を供え、幟旛（のぼりばた）を立て、音楽を奏（かな）でて、恭（うやうや）しく供養、讃歎しなければなりません。もし、この塔を見ることができて、礼拝供養することができたら、その人は**『仏の悟り・智慧』**に大きく近づいたことなります」

**【二〇八頁 四行】**「**薬王**よ。在家や出家の修行者が菩薩道を行じていても、／（『若（も）し是（こ）の法華經を見聞（けんもん）し讀誦し書持（しょじ）し供養すること得ること能（あた）わずんば、當（まさ）に知るべし、是（こ）の人は未だ善（よ）く菩薩の道（どう）を行ぜざるなり』）この法華経に出遭（であ）えず、法華経を聞くこともなく、読誦、書写、受持ができなければ、その人は十分に菩薩道を修することができないと知らなければなりません。／（『若（も）し是（こ）の經典を聞くこと得（う）ることあらん者は、乃（すなわ）ち能善（よく）菩薩の道（どう）を行ずるなり』）しかし、もし法華経を聞くことができたならば、菩薩道を間違いなく、正しく行ずることができると言えます」

**【二〇八頁 七行】**「もし衆生の中に仏道を求める者がいて、この法華経を聞き、よく理解し、信解（しんげ）して、しっかりと法華経を受持するならば、その人は**『仏の悟り・智慧』**に近づいたことができたと言えます」。

## ―― 【高原穿鑿の譬え・こうげんせんしゃく の たとえ】

**【二〇八頁 終三行】**「**薬王**よ。譬（たと）えば、水のない砂漠のような高原で、喉（のど）が渇（かわ）いて苦しむ人が井戸を掘ったとしましょう。しかし掘っても掘っても土が乾いている時は、水脈はまだ遠いのです。それでも諦めずに掘り続けて行くと、徐々に湿った土が出てきて、ついには湿った土が泥となって出てきます。そうなれば、いよいよ水が近いことが確信となります。これと同様に、菩薩と法華経の関係も同じです」

―― **以上、【高原穿鑿の譬え】**

**【『高原穿鑿の譬え』のかみ締め】――**

**【二〇九頁 一行】**「もし、法華経を未だ聞いたことがなく、または理解できず、一つも実践

できない人は、**『仏の悟り・智慧』**には程遠い状態で、掘っても乾いた土しか出てこない状態と同じだと言えます」

**【二〇九頁 三行】**（『若し聞解（もんげ）し思惟（しゆい）し修習（しゅしゅう）することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』）「ところがこの法華経と出会い、教えを聞くことができ、その教えを聞き、思索し、実践(**聞解・思惟・修習**)する人は、掘っている土が湿り気を帯びた状態だと言えます。**『仏の悟り・智慧』**に近づいているということを知らなければなりません。／（『所以（ゆえ）は何（いか）ん、一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此（みな こ）の經に属せり』）なぜなら、**『仏の悟り・智慧』**は、この法華経の中に解き明かされているからなのであります」

**【(偈)二一〇頁 終行】**（『諸（もろもろ）の懈怠（けだい）を捨てんと欲せば ～ 信受する者亦（また）難（かた）し』）「もし怠（おこた）る心を捨て去ろうと思うならば、必ず法華経を聞きなさい。この法華経はなかなか聞くことができない教えであります。信受することが難しい教えですが、怠る心を捨てることができる教えです」

**【方便も真実に通ずる一仏乗の教え。『開三顕一』】――**

**【二〇九頁 五行】**（『此（こ）の經は方便の門を開いて眞實（しんじつ）の相を示す』）「この法華経は、**『方便の門』**を開いて**『真実の相』**を示すものであります。法華経は大変深淵で奥深い教えで、容易に理解できるものではありません。／（『今佛（いま ほとけ）、菩薩を教化し成就して爲に開示す』）そのために私は、菩薩を教化することを通して**『仏の悟り』**を示し、**『真理の教え』**を分かり易く説き示そうとしているのです」

**【法華経を聞いてたじろぐ者は、新発意(しんぼっち)の菩薩、増上慢の者】――**

**【二〇九頁 七行】**「**薬王**よ。もし菩薩の身でありながら、法華経を聞いて驚き、または疑ってみたり、怖（おそ）れる気持ちや遠慮して躊躇（ためら）う気持ちを持つならば、その菩薩は初心の菩薩、**新発意(しんぼっち)の菩薩**だと言えます。もし声聞の人のなかで、同様に驚き、怖（おそ）れるならば、そのような声聞は**増上慢**の人だと言えます」

**【『衣・座・室の三軌・えざしつ の さんき』】――**

**【二〇九頁 終三行】**「**薬王**よ。もし如来の滅後に出家・在家の修行者に法華経を説くとき、どのように説けばよいかと言いますと、／（『如來の室（しつ）に入（い）り、如來の衣（ころも）を著（き）、如來の座に坐（ざ）して』）それはまず**『如来の室(しつ)』**に入り、**『如来の衣(ころも)』**を着て、**『如来の座(ざ)』**に座って教えを説かなければなりません」

**【二一〇頁 一行】**（『如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是（こ）れなり』）「❶**『如来の室』**とは一切衆生に対する**《大慈悲心》**であり、／（『如來の衣とは柔和忍辱（にゅうわ にんにく）の心是（こ）れなり』）❷**『如来の衣』**とは**《柔和・忍辱の心》**であり、／（『如來の座とは一切法空（ほう くう）是（こ）れなり』）❸**『如来の座』**とは一切は**《空》**であることを知ることです。すなわちすべては**《平等》**であるということを知ることです。この**《大慈悲心》**と、**《柔和忍辱の心》**と、**《空》**をしっかりと心に刻み、そして怠（なま）けない強い意志の心を以って、菩薩および在家・出家の人々のために法華経を説かなければなりません。**【(偈)二一一頁 八行】**／（『衆（しゅう）に處（しょ）して畏（おそ）るる所なく 廣く爲に分別し説くべし』）そして、多くの人々に対して決

して怖（おそ）れはばかることなく、そして躊躇（ためら）うことなく、法華経の教えを誰にでも解るように説かなければなりません。**大慈悲心**を発し、**柔和忍辱**の心をもって、徹底した平等つまり、**『空』**の悟りを根底として説かなければならないのです」

**【衣・座・室の三軌 ・ えざしつ の さんき】**

**【『法華経』を説く者を、仏は守護する】――**

**【二一〇頁 四行】**（『我餘國（よこく）に於て、化人（けにん）を遣（つか）わして其れが爲に聽法（ちょうぼう）の衆を集め』）「**薬王**よ。私がこの世を去った後、その他の世界で法華経を説く場があったならば、私はその場に大衆の人々や在家・出家の修行者をつかわせましょう。それらの人々は教えをしっかりと受持し、教えを実践することを怠りません。／（『空閑（くうげん）の處（ところ）に在（あ）らば、我時（われ とき）に廣（ひろ）く天・龍・鬼神～ 遣（つか）わして、 其（そ）の説法を聽（き）かしめん』）**【(偈)二一二頁 終五行】**（『我（われ）天・龍王 夜叉（やしゃ）・鬼神等を遣（つか）わして 爲（ため）に聽法の衆となさん 是（こ）の人法を樂説（ぎょうせつ）し 分別（ふんべつ）して罣礙（さわり）なからん 諸佛護念したもうが故（ゆえ）に 能（よ）く大衆をして喜ばしめん』）もし、法を聞く者が一人もいなければ、私は天上界の人や龍神・鬼神など、人間以外のさまざまな神々をつかわせ、法を聞かせます。そして法華経に疑いを持たせずに理解させます。これは諸仏が加護することによって起こるもので、法を聞いた者は喜びに包まれます」

**【二一〇頁 八行】**「私は他の世界でも、／（『時時（じじ）に説法者をして我が身を見ることを得せしめん』） 時に応じて法華経を説く者の前に姿を現します。／（『若し此の經に於て句逗（くとう）を忘失（もうしつ）せば、我還（かえ）って爲に説いて具足することを得せしめん』）**【(偈)二一二頁 五行】**（『若（も）し章句（しょうく）を忘失（もうしつ）せば 爲（ため）に説いて通利（つうり）せしめん』）もし説法中に法華経の章句を忘れたり、教えの字句を忘れることがあったならば、私はその場に出向き、完全に思い出させてあげましょう」

**【(偈)二一一頁 終二行】**（『我（われ）千萬億の土（ど）に 淨堅固（じょうけんご）の身を現じて 無量億劫（むりょう おっこう）に於て 衆生の爲に法を説く』）「私はあらゆる現象を超越した不滅の身です。清浄であり、かつ真理そのものを体現した身です。ですから、久遠の昔から無限の未来に至るまで、ありとあらゆる世界に出現し、衆生のために法を説くことができるのです」。

**【(偈)二一二頁 四行】**（『獨（ひとり）空閑（くうげん）の處（ところ）に在（あ）つて 寂寞（じゃくまく）として人の聲（こえ）なからんに～ 清淨光明（しょうじょう こうみょう）の身を現ぜん』） 「もし、法を説く者が、人のいない閑散とした場所で法華経を読誦するならば、私は清浄な光を放って光明に輝く身となって、その人の前に現れます」

**【(偈)二一一頁 終行】**（『若（も）し我（わが）滅度の後（のち）に～ 清信士女（しょうしんじにょ）を遣（つか）わして法師を供養せしめ～ 法を聽（き）かしめん』）「もし、私がこの世を去った世で、法華経を説く人がいたならば、私は出家・在家の修行者をその人の前につかわせて、その法を説く者『法師』に供養させ、多くの人々を導き、教えを聴聞（ちょうもん）させるようにしましょう」

**【『法華経』を説き広める者の心得】――**

**【(偈)二一一頁 終三行】**（『人あって惡口（あっく）し罵（ののし）り 刀杖（とうじょう）・瓦石（がしゃく）を加（くわ）

うとも 佛を念ずるが故（ゆえ）に忍ぶべし』）【(偈)二一二頁 二行】（『若し人惡刀杖（あくとうじょう） 及び瓦石（がしゃく）を加（くわ）えんと欲せば 則（すなわ）ち変化（へんげ）の人を遣（つか）わして 之（これ）が爲に衛護（えいご）と作（な）さん』） 「もし法華経を説く者を罵倒し、悪意をもって刀や棒をふるい、石を投げつけて迫害を加えようとするならば、その時は必ず仏を念じて耐え忍びなさい。仏はすぐさま化身の者をつかわせて、法華経を説く人の身を守ります」

【(偈)二一二頁 六行】（『若（も）し人是（ひと こ）の徳を具（ぐ）して 或（あるい）は四衆の爲に説き～ 皆（みな）我が身を見ることを得ん』） 「以上が法華経を説く功徳であって、これらの徳目を具えた人が法華経を説くならば、たとえ人のいない静かな場所であっても、みんな例外なく、私の姿を目にし、仏と共にいる実感を覚えるでしょう」

**【『法師(法華経を説き、実践する者)』の通りに行動すれば、すべての人が『仏』に見える』】――**
【(偈)二一二頁 終二行】（『若し法師に親近（しんごん）せば 速（すみや）かに菩薩の道を得（え） 是（こ）の師に隨順（ずいじゅん）して學せば 恒沙（ごうじゃ）の佛を見たてまつることを得ん』） 「もし法華経を説く者・『法師』に親しく近づくならば、直ちに菩提心を起こして『菩薩の道』を歩むことができます。そればかりか、この『法師』の通りに実践すれば、その結果、ガンジス河の砂の数ほどの無数の仏に出会うことができるのです」と、末世で法華経を説く者の**心構え**、仏さまの**守護**、仏さまから頂ける**功徳**を説き明かされたのでした。

◇　◇　◇

## 迹門（しゃくもん）の流通分（るつうぶん）

(P217・終 2 行／P169・6 行)

流通分（るつうぶん）というのは、そのお経で説かれた教えを理解し、実践すれば、どんな精神的功徳があるか、どんな善い行ないができるか、どんなに世のため人のため役立つことができるかを説かれ、その教えを受持し、実践し、そして人のために説き広めることをお勧めになった部分をいうのです。

## 素直（すなお）な感動（かんどう）　一念随喜（いちねんずいき）

(P221・終 3 行／P172・終 2 行)

教えに対する**『素直な感動』**が、どんなに大切なものであるか。そしてそれが、どんなに大きな**『救いと悟りの要因』**であるかを教えられたものです。～　素直な感動をおぼえる柔軟（じゅうなん）な心こそ、**『人間を大成させる跳躍台(ちょうやくだい)』**となるのです。～仏の教えは偉大なるもののなかでも、最も偉大なるものであります。その仏の教えを聞いて**『素直に感動』**し、**『素直に信ずれば』**、その人は必ず**『無限に高められる』**のです。

『成（ことごと）く佛前（ぶつぜん）に於（おい）て妙法華經（みょうほけきょう）の一偈一句（いちげいっく）を聞（き）いて、乃至一念（ないしいちねん）も隨喜（ずいき）せん者（もの）には我皆記（われみなき）を與（あた）え授（さず）く』　（二〇二 頁 四行）

## 《思惟のひととき　①》

「教えに対する**《素直な感動》**こそが、**『救いと悟りの大きな要因』**であり。**『素直に感動』**し**『素直に信ずれば』**、その人は必ず**『無限に高められる』**のです」と庭野開祖は指導くださっています。

**── この「《素直な感動》こそが、『救いと悟りの大きな要因』」。「『素直に感動』し、『素直に信ずれば』、その人は必ず『無限に高められる』」という庭野開祖の指導を、あなたはどのように受け止めますか？ 考えてみましょう。**

## 随喜を伸ばす修行と供養

(P224・終 3 行／P174・終 2 行)

「ありがたい」と思ったその感動は、**《成仏の種子》**であります。～

ところが凡夫の常として、日が経つにつれて**《初随喜》**の感動がうすれていったり～そのために、まっすぐに仏の方へ進まないで、左へ右へヨロヨロとよろけがちになります。そこで**「修行」**と**「供養」**が必要になってくるのです。

**「修行」**と**「供養」**怠らず続けていけば、**《随喜の心》**は新たに次から次へと湧き出して来ますから、上へ向かって進む動きは次第に加速度が加わって来るのです。

その**「修行」**とは、**『五種法師の行』**であり、**「供養」**とは**『仏さまと、仏さまの教えに感謝の真心を捧げ』**、**『行によって感謝の真心をあらわす』**ことであります。

## 五種法師

(P231・5 行／P179・終 2 行)

「受持」を**『正行・しょうぎょう』**。以下の四つ「読・誦・解説・書写」を**『助行・じょぎょう』**と言います。なぜ「受持」を正行と言って他と区別するかと言いますと、五つのなかでこれが一番根本であり、これが本物になっていなければならないからです。

## 《思惟のひととき　②》

**『喜びと感動』を持続させるためには、「五種法師」の行を実践と、「仏さまへの感謝の真心を捧げる」ことである。と庭野開祖は説かれています。**

**── 私はこの「五種法師の行」と「仏さまへの感謝の供養」を、どこまで出来ているでしょうか？ かみ締めてみましょう。**

『是の諸人等は已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て大願を成就して、衆生を愍むが故に此の人間に生ずるなり』(二〇三頁　一行)

## 《思惟のひととき　③》

「已（すで）に曾（かつ）て十万億の佛を供養し」と説かれており、私たちはあらゆる人を拝んでいた自分でした。
　**―― では、現世の私は、あらゆる人、つまり私を困らせる人・怒りを覚える人・嫌いな人・私を惑わせる人を拝むことができているか？　振り返ってみましょう。**

## 《思惟のひととき　④》

「衆生を愍（あわれ）むが故に此の人間に生ずるなり」の経文を、あなたどう受け止めますか？　かみ締めてみましょう。

## 貧者の一灯

（P235・終6行／P183・終6行）

真心があれば、必ず何らかの「形」をとって現れてくるのものですが、その現われは如何に貧しくても、形式的な豪華な捧げ物よりも、はるかに価値あるものであります。

## 心と行ないは循環する

（P240・7行／P186・1行）

心を行ないに現わすことによって、心はますます深まるものであるからです。

## 《思惟のひととき　⑤》

**「心を行ないに現わすことによって、心はますます深まる」と『行ないに現わすことの大切さ』、『実践することの大切さ』を庭野開祖は説かれています。**
**――　このご指導をあなたどう受け止めますか？　かみ締めてみましょう。**

『是の諸人等は未來世に於て必ず作佛することを得ん』（二〇三頁　四行）

『法華經の乃至一句に於ても受持・讀誦し、解説・書寫し～ 是の人は一切世間の膽奉すべき所なり、如來の供養を以て之を供養すべし』　（二〇三頁　五行～八行）

『衆生を哀愍し願って此の間に生まれ、廣く妙法華經を演べ分別するなり 』

（二〇三頁　終四行）

## 願生

（P246・終2行／P191・2行）

「菩薩」は、仏になることのできる身でありながら、浄土に生まれる果報を捨てて、衆生をあわれむが故に、自ら願って人間に生まれるというのです。～ **衆生を救おうという「願い」と「慈悲心」によって生まれ変わって来る**のです。これを**『願生』**といいます。

『是の人は自ら清浄の業報を捨てて』　（二〇三頁　終二行）

『我が滅度の後、能く竊かに一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん。當に知るべし、

是の人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行ずるなり』

（二〇四頁　一行）

## 人に依らず法に依れ　(P253・終 2 行／P196・6 行)

《人に依らず、法に依れ》ということを教えられたのです。**《人よりも法が尊いのである》**ということを、非常に強い表現でおっしゃっておられるのです。

## 法は人によって興る　(P254・6 行／P196・終 3 行)

（人よりも法が尊い）かといって、これを浅く解釈して、人は軽んじてもよいと考えるようなことがあったら、大変な思い違いです。～ 法を説く人、法を伝える人は、法そのものと同様に尊重されなければなりません。

『若し惡人あって～ 現に佛前に於て常に佛を毀罵せん～ 在家・出家の法華經を讀

誦する者を毀訾せん、其の罪甚だ重し』　（二〇四頁　四行）

なぜ、仏さまを罵（ののし）るよりも、のちの世で法華経行者を罵るほうが罪が重いとおおせらえるのかといえば、これは、末世（まっせ）においてこそ正法を説くことが、より重要であり、より困難であるからです。　(P279・5 行／P216・1 行)

『其れ法華經を讀誦すること有らん者は、當に知るべし、是の人は佛の莊嚴を以て

自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷担せらるることを得ん』（二〇四頁　七行）

『是の讃佛に由るが故に無量の功德を得ん』　（二〇六頁　終五行）

正法を悟った者を讃嘆する行いによって、はかりしれない功德を得ることができる。

## 仏さまを礼拝する時の心がまえ　(P281・6 行／P217・終 5 行)

仏さまを礼拝するとき、「**功德を与えてくださいと念ずるのはおかしなことで**、正法を悟ったお方を讃嘆し、正法を説いてくださった恩恵に対する**感謝を込めて礼拝すれば、功德**は**おのずから生ずる**のです。**与えられるのではなく、「生ずる」のであります。自ら「得る」のであります**。

## 《思惟のひととき ⑥》

私たちが仏さまに跪（ひざまず）く時、どのような心で手を合わせ、跪いているのでしょうか？　振り返ってみましょう。

『我が所説の諸經　而も此の經の中に於て　法華最も第一なり』　（二〇六頁　終行）

（もとより、あらゆるお経が尊いのです。）すべてのお経の精髄を、絞って絞って絞りぬいて、そのエッセンスを集めたのが、この**『法華経』**であるからです。

『此の法華經最も爲れ難信難解なり。藥王此の經は是れ諸佛の秘要の蔵なり。

～ 諸佛世尊の守護したもう所なり』　（二〇七頁　二行）

『他人の爲に説かん者は、如來則ち衣を以て之を覆いたもうべし』（二〇七頁　六行）

### 厚い仏の加護

（P298・終２行／P231・１行）

これは、他力によって身の安全を保護するというのではなくて、その人の**《寛容性》**を高め、いわゆる**《忍辱》**の心を深めることによって、自らその聖なる事業を守っていくように、如来が助け導いて下さることを意味しているのです。

『是の人は如來と共に宿するなり。則ち如來の手をもって其の頭を摩でたもうを

爲ん』　（二〇七頁　終四行）

### 仏と共にあり！

（P300・４行／P232・３行）

法華経をしっかり受持し、読誦し、他人のために説くものは、それが（仏さまと一緒にいることを）まざまざと感じられるようになるのです。

### 仏の深い信頼

（P300・終３行／P232・８行）

法華経行者は、仏さまからいつも頭をなでられているわけです。仏さまから大きな信頼を寄せて頂けるわけです。ありがたいことです。もったいないことです。

『此の中には已に如來の全身います』　（二〇七頁　終行）

## 如来の全身います　(P302・終6行／P234・2行)

《物》を礼拝（らいはい）するなかれ、《正法》をこそ礼拝せよ！
《正法》を伝える《物》は、正法の象徴である。あがめて尊んで礼拝せよ！
「その仏塔の中に仏舎利などを祀（まつ）る必要はない。なぜならば、仏の教えの中にこそ如来の全身があるからである」。～ 物を礼拝せず、正法をこそ礼拝せよ。
―― なんという理性的、正法尊重のおことばでしょう。
～ 《物》に帰依し、《物》を礼拝し、《物》に祈願してはなりません。なぜならば、それは人間と相対的な関係にあるものに依存することであり、**『宗教の本義』**にはずれるからであります。

## 高原穿鑿の譬え　(P314・2行／P242・6行)

新しい希望と勇気とを得て。今度は苦しみも疲れも忘れて掘り進むようになる。これが**『菩薩行』**にほかなりません。～ 自他にそなわっている**仏性**を知り、自他の**仏性**を開発すればみんなが一緒に救われるのだと知った後は、今度は楽しみがいっぱいになって、積極的に**自行化他に突き進む**ようになります。そこが**法華経のありがたさ**です。

## 衣・座・室の三軌　(P328・2行／P253・終6行)

**法師品の要点**「**如来の室**（大慈悲心）」「**如来の衣**（柔和忍辱）」「**如来の座**（一切法空）」

『如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して』　（二〇九頁 終行）

## 慈は共に楽しみたい心　(P330・5行／P255・2行)

**『慈』**の心は、**平等心**から生ずるのだと、仏さま教えられています。～　ですから『慈』とは、一口にいえば**《与楽(よらく・楽しみを与える)の心》**だと定義されています。

## 悲は苦を同感する心　(P331・終5行／P255・終2行)

**『悲』**は、人生のさまざまな問題に悩み苦しんでいる人々の声を聴いて「自分も**同感し、同情する**」ことを意味します。～　なんとかその苦しみから引きあげてあげたいという心を起こさざるをえません。**《抜苦(ばっく・苦を抜く) の心》**であると定義されています

## 《思惟のひととき　⑦》

○《慈》とは、「他の人にも同じ楽しみを味合わせてあげたい」。「いい教えを聞いて喜びを覚えれば、その喜びを他の人にも分けてあげたい」という心(与楽の心)。
○《悲》とは、「人の苦をわが苦しみのように感じ、何とかしてその苦から引き上げてあげたい」という(抜苦の心)。　　だと庭野開祖は説かれます。
── では、私はこの《慈》と《悲》について、果たしてどこまで見えているか？
振り返ってみましょう。

## 《思惟のひととき　⑧》

「如来の衣」とは「柔和忍辱の心」であると説かれています。ではこの「柔和忍辱の心」とはどのようなことを意味するのか？　かみ締めてみましょう。

### 空を積極的に悟る

(P344・4行／P264・終4行)

すべてのものごとは、本来固定した差別のない、**平等で大調和しているもの**なのです。つまり、現象に善も悪もないのです。～ **すべてのものは、あるべくしてあるのです。**～ 他の人の存在の尊厳さをも認めざるをえません。そこに、仏教でいう《**平等心**》の誕生があるのです。

## 《思惟のひととき　⑨》

「空の教えをしっかりと保つ」とはどういうことか？　かみ締めてみましょう。

『我餘國に於て、化人を遣わして其れが爲に聽法の衆を集め』　(二一〇頁　四行)

『空閑の處に在らば～ 阿修羅等を遣わして其の説法を聽かしめん』(二一〇頁　七行)

『若し此の經に於て句逗を忘失せば、我還って爲に説いて具足することを得せしめん』　(二一〇頁　終四行)

『是れ諸經の王なるを聞き 聞き已って諦かに思惟せん 當に知るべし此の人等は佛の智慧に近づきぬ』　(二一一頁　五行)

『人あって惡口し罵り　刀杖・瓦石を加うとも 佛を念ずるが故に忍ぶべし』

(二一一頁　終三行)

## 仏を念ずるとは　(P362・6 行／P279・1 行)

仏を念ずるとは、

① **「自分は仏さまの代わりに仏さまの仕事をしているのだ」**と、その行ないの本質を思いだすこと。

② **「仏さまのお仕事をしている以上、必ずご加護がある」**と**仏さまとの一体を確信すること**です。

その確信があれば、目前に迫る様々な不利な現象を、あれこれと気にしなくなります。仏さまの**ご加護とは**、つまり**正法が守ってくれる**ということです。

## 《思惟のひととき　⑩》

**「仏さまのお仕事をしている以上、目前に不利な状態が起こっても恐れることはない」**と庭野開祖は説かれています。── では私は、不利な現象に遭遇した時、そのような気持ちでその現象に向かい合うことができているか？　振り返ってみましょう。

## 是の師に隨順して學せば 恒沙の佛を見たてまつる　(P374・2 行／P288・7 行)

法師を先生として学べば、真如である仏の教えをしっかりとつかむことができますから、〜 仏に無数に会うことができるわけです。

『若し法師に親近せば 速かに菩薩の道を得 是の師に隨順して學せば 恒沙の佛を見たてまつることを得ん』　(二一二頁　終二行)

## 《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の『法師品第十』の学びを通して、何を学び取ったか？
（何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　話し合ってみましょう。

合　掌